

保健体育(中)部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

生きる力を育てる創造的な保健体育学習の在り方
～ 豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育てるために ～

2. 研究内容

- 1 する楽しさ、見る楽しさ、支える楽しさ、知る楽しさを実感できる学習の工夫
(主体的な学びを引き出すグループ活動や言語活動、ICTの活用など)
- 2 個別最適な学びと協働的な学びの指導方法の工夫
- 3 体力向上に向けた実践の交流と検証
(発達段階に応じた補強運動、小中学校の連携など)

3. 主題設定の理由

石教研の基本目標にある主体的・創造的で人間性豊かな子どもに育てるには、生きる主体として自らを捉え、自己の個性を創り出し、豊かな社会の形成者となる資質を身に付けさせることが必要である。部会では、「生きる力を育てる」を目標に研究を進めてきた。

第28次研究では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通じて、生徒一人一人が確かな知識や技能を身に付け、自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考判断する力を養うことが目標になる。

学習指導要領の教科目標に示された「豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成」を副主題に設定し、研究を充実・発展させていくことが研究主題や部会目標の達成につながると考え、上記主題を設定した。

4. 研究仮説

保健体育学習において、する楽しさ、見る楽しさ、支える楽しさ、知る楽しさを実感できる学習の工夫(主体的な学びを引き出すグループ活動や言語活動)は、生徒の運動への意欲を高め、生き生きと運動に取り組む生徒の育成につながると考えた。さらに、個別最適な学びと協働的な学びの指導方法の工夫(ICTの活用などによる指導の個別化、学習の個性化、評価方法など)と、体力向上に向けた実践の交流と検証(発達段階に合わせた補強運動、小中学校の連携など)を実践することにより、創造的な学習活動が展開され、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成につながると考え、仮説を設定した。

5. 研究方法

1. 部会情報を発行し、共通理解を図る。
2. 研究中心市町村部会と中心校を定め、授業公開と資料提示を行う。
3. 実践記録集を編集する。
4. 部員相互の資質向上のため、実技・理論研修会を開催する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 役員研修会

4月15日(火)	専門部会第一次研究協議会及び第1回役員研修会、第1回推進委員研修会
5月13日(火)	専門部会役員研究会
5月15日(火)	第2回役員研修会・第2回推進委員研修会
6月27日(金)	第1回石教研専門部会事務局長研修会
7月8日(火)	第3回役員研修会・第3回推進委員研修会
9月11日(木)	第4回役員研修会・第4回推進委員研修会
9月16日(火)	理論研修会「最新の授業実践に基づく講演」について
10月6日(月)	第二次研究協議会プレ授業
10月17日(金)	石教研専門部会第二次研究協議会
11月6日(木)	第5回役員研修会
11月18日(火)	第2回石教研専門部会事務局長研修会

(2) 役員研修会の成果

役員研修会では、実技・理論研修会、第二次研究協議会に向けての準備などを行ってきた。

今年度は、「バレーボール」についての授業研究のため、役員と各市町村の推進委員との話し合いを中心に研究を進めた。また、石狩管内の生徒の体力向上に向けた取組について検討した。各市町村の推進委員からは、各校の実践についての発表もあり、役員と推進委員が協力し合いながら、保健体育部会の取組を発展させようとすることができた。また、第二次研究協議会へ向けての準備も、時間をかけて話し合いをしながら進めることができた。当日は何事もなくスムーズに進行することができた。

2. 専門部会第二次研究協議会での交流

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容

① 授業公開の様子

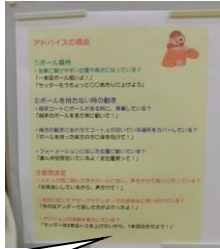
3年生 単元 球技 ネット型 「バレーボール」
授業者 西田 翔 教諭 (千歳市立勇舞中学校)

(1) 本時の目標

チームの役割分担について、自己の成果と課題を振り返っている。(思考・判断・表現)

(2) 本時の展開

	○生徒の学習活動 ・予想される生徒の反応	○教師の主な働きかけ	◇評価内容□評価方法
導入 10分	○挨拶 ○前時の振り返り ゲームの動画を撮影し、チームの作戦や戦術についての課題を話し合った。 ○チームごとのウォーミングアップに取り組む ○本時の学習課題の把握	○適切な練習ができているか、助言を与える。	
課題：アナリストとして、どのようにアドバイスをすれば、よりラリーが続くだろう？			
	アナリストとしてゲームを観察し、適宜選手に助言を与える中で、自己のアドバイスが有効		

<p>であったかについて振り返る時間であることを把握する。</p> <p>○「選手だったら、どのようなアドバイスが欲しいか?」「アナリストであったらどういったアドバイスが有効か?」という問いについて考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボール操作やフォーメーションについての助言が有効だと思う 	<p>○生徒に質問をし、本時ではどういった助言をするべきか明確にする。</p>	
--	---	---

生徒に伝わりやすい提示の工夫

<p>展開 30分</p> <p>○ゲームの進め方を把握する</p>		
--	--	--

* 6人対6人の試合を2面で実施。試合のないチームはアナリストとして観察する。

* 試合は6分間実施する。アナリストは試合中に応援や、助言を適宜行う。試合後、3分間の作戦時間を設け、アナリストからのフィードバックを選手が受け取り、次のゲームに生かす。

* ローテーションを実施する。ポジションチェンジは自由に行ってよい。

* サービスからの試合とするが、アンダーサービスに限り、コート内からのサービスを認める。

* セッターは白、レシーバーは赤（ピンク）、アタッカーは青（水色）のビブスを着用する。

<p>○アナリストが分析する視点やポイントを例示する</p>	<p>○本時で観察すべき視点やポイントを明確にし、ゲームに臨ませる。</p>	
--------------------------------	--	--

アナリストの役割

チームを応援しながらゲーム状況を分析し、適切な助言を行う。

以下の3つの視点から分析し、それぞれKeep「=良かったこと」、Problem「=悪かったこと、直したいこと」に整理する。

①ボール操作


- ・攻撃につなげるための次のプレイをしやすい高さや位置にボールを上げているか? (レシーブやトスの正確さ)
- ・ポジションの役割に応じて、拾ったりつないだり打ち返したりしているか? (レシーバーやセッター、アタッカーが自らの役割を果たしているか?)

②ボールを持たない時の動き

- ・相手コートにボールがある時に、ボールに備えた準備動作をしているか?
- ・ラリーの中で、味方の動きに合わせてコート上の空いている場所をカバーしているか?
- ・フォーメーションに応じた位置に動いているか?

③意思決定

- ・人と人の間に飛んできたボールに対し、声をかけて取りに行っているか?
- ・状況に応じてアタックやアンダーハンドパスでの返球などを使い分けているか?

<p>○ゲームに取り組む</p> <p>ゲームでは、試合⇒作戦会議⇒試合のプロセスを踏み、単元全体の目標である三段攻撃の習得に向けてチームで工夫を重ねる。</p>	<p>○アナリストについては、必要であれば動画を撮影させ、上記の視点に沿って分析をさせる。</p>	
---	---	---

Canva を使って分析

終 末 1 0 分	まとめ：ラリーを続けるために、ボール操作やボールを持たない時の動き、意思決定について分析し、助言することが有効である。		
	○分担した役割に関して ①自分がした助言と、その効果 ②チームへの貢献 の2点から振り返りを行う ○チーム内で本時の振り返りを行う ○次時の予定を確認する ○挨拶・後片付け	○スポーツを「する」以外にも認識させ、それぞれに、よりよいゲームにするための効果的な関わりについて振り返らせる。	◇チームで分担した役割に関する成果や改善すべきポイントについて、自己の活動を振り返っている。 □振り返りの記述内容

(3) 本時の評価

	A	B	C
思考・判断・表現	チームで分担した役割に関する成果や改善すべきポイントについて、具体例を挙げて自己の活動を振り返っている。	チームで分担した役割に関する成果や改善すべきポイントについて、自己の活動を振り返っている。	Bに満たない

2. 専門部会第二次研究協議会での協議内容

①授業についての質疑応答

ア) 授業者より

今回の授業を通じて運動の4観点「する・見る・知る・支える」に着目した授業展開の実践を行った。単元の中では4時間目の試合から少しずつ良いラリーを続けることができたこと、今回の授業の中でもアナリストとしての成長も見られてよかった。課題の提示として苦慮した部分もあった。



イ) 共同研究者より (千歳市立勇舞中学校 水野 広信 教諭)

最初の段階では、課題を三段攻撃としてアナリストとの関わりを中心にしていましたが、多くの方からの助言をいただいてからアナリストとの関わりを中心にした、授業展開に変えたことで新しい授業の形になったと思う。

ウ) 質疑応答より

Q. 単元の構成においてどんな積み重ねがあったのものなのか?

個人技能の練習を前半は中心に行い、5～7時間目は三段攻撃に特化して行なった。その中でも常に動画を撮影することで上達につながるという視点を身に付けるように助言していた。

Q. 課題に対してのゴールはアナリストとしての関わりの中での伸びしろなのかラリーの回数なのか?

アナリストの助言に対して、ラリーの回数が何回増えたのかという伸びしろを考えて授業を行った。

エ) その他の交流内容 (グループ討議の内容も含む)

- アナリストという立場があることで、授業に意欲的に取り組むことができていた。会話も豊富でよかった。アナリストとして1年生からの積み上げがあればさらによくなる。
- 運動4観点を実感できる学習の工夫であった。アドバイスする視点も明確であったため、コミュニケーションが苦手な子でも発言しやすかったと思う。
- 個人の技術によるのではなく、戦術へのアドバイスが出てくるとよい。

オ) 助言者より (千歳市立向陽台中学校 高橋 真吾 教頭より)

本授業では、バレーボールにおいて活気あるゲーム展開を実現することの難しさを感じつつも、系統的な指導の成果が見られる授業となった。個別最適な学びと協働的な学びを両立するためには、主体的・対話的で深い学びの実現が不可欠であることが確認された。ウォームアップにおいては、複数のボールを使用するため管理が難しいという課題があった。一方で、ビブスによるチーム分けを行ったことで、アナリストが選手の動きを分析しやすくなり、特にオフザボール時の動きに関する助言が有効であった。アナリストはメモ程度の記録にとどめることで、ゲームから目を離さずに観察を継続できた。また、戦術的な情報をアナリストが把握しておくことの有用性も示唆された。さらに、学習活動においては、一人一人にとって意味のある問いを設定すること、学びを「見える化」する仕組みを導入すること、そして発問や成功体験を通じて「できた」という実感を積み重ねることの重要性が明らかになった。

②実践交流での協議内容

各学校の実践交流を行い、球技から器械運動、保健まで幅広く多くのレポートが集まり、どの実践も先生方の工夫を凝らした指導案であった。今後の授業にすぐに活用できるようなものばかりであった。今年度もワールドカフェ形式のグループ討議にしたことで、意見交流もより活発に行われた。特に、「体力向上」についての実践交流や先生方が抱えている疑問等が解決できるようなより深い実践交流になった。

③第二次研究協議会での成果

西田教諭による授業公開では、ICTを活用してチームの動きを客観的に分析することで課題を明確化し、個別最適な学びの実現につながった。ポジションやアナリストなどの役割分担を通して戦術理解や連携力が高まり、協働的な学びが一層促進された。午後からは、恵明中学校の東海林教諭に実技研修を行っていただいた。道具の活用方法や、運動局面ごとに分けた専門的な指導方法について丁寧にご指導いただき、参加した教員にとって授業づくりの大きなヒントとなる有意義な時間となった。後半は、レポート集を用いた各学校の実践交流を実施した。少人数グループを入れ替えながら、より多くの部会員と意見を交わす形式で進めたことで、活発な意見交換が行われた。管理職の方々にも各グループでの交流に参加していただき、助言をいただく場面も見られた。どのグループでも、全体討議よりも一層深い議論が生まれ、実り多い時間となった。

III. 教育課程の研究

1. 研究の経過

今年度も、保体(小)部会に役員を派遣し、研究授業の参観を行った。小学校の授業では、器械運動を題材に、倒立の運動課題を中心に自分の動きと見本の動きと比較しながら授業が行われていた。ICTの活用も積極的に行われ、ゆさぶりの場面の設定などもあり運動への意識が高まる授業内容だった。

2. 研究の成果・課題

保体(小)部会の授業では、ICTの活用により、自分の動きを見本と比較することで児童の自主性を促し対話を中心とした授業が実践されていた。また、準備運動も主運動につながる内容に工夫され、授業の全体的な流れが統一されていた。課題として、個別最適な学びと学習の振り返りをより深める必要があり、小学校も中学校も目指す形は同じであることがわかった。今後も小中学校の連携を強化し、学びの継続性を確保することが大切である。

IV. 実技・理論研修会

1. 実技・理論研修会の趣旨と内容

①バレーボールの実技研修会

第二次研究協議会の午後は、恵明中学校の東海林教諭によるバレーボールの実技研修を行った。ゲームライクの3つからなる運動内容について研修が行われた。ルールや場の設定に多くの工夫が見られ、男女関係なく生徒が楽しめる内容であり、実践しやすい内容であった。専門家ならではの指導方法で丁寧に教えていただき、参加していた先生方が意欲的に動く姿が印象的だった。



②理論研修会

今年度は、北海道教育大学札幌校の中島寿宏教授を講師にお招きして「最新の授業実践研究に基づく講演」を行った。授業改善のためのアプローチ方法から熟練教師の授業づくりの行い方など授業力を向上させるための手立てに関する理解を深めた。



2. 実技・理論研修会の成果

実技研修会では、先生方が日頃指導に悩んでいる部分を自分たちが練習を実際に体験することで、練習をさせる側（授業者）の視点と練習をする側（生徒）の感覚を近づけることができた。今後も、指導していただいた内容を参考にしながら、個々の指導技術の向上に努め生徒の実態に合わせて工夫していきたい。

理論研修会では、講演を通して日頃の授業改善につながる手段を学ぶことができた。参加者一人一人が今回学んだことを実践し、一人でも多くの人に伝達していくことで生徒の健やかな成長に繋がっていくことが期待できる。

V. 部会研究の成果と課題

今年度は「バレーボール」の授業を展開していただき、研究内容1点目の「する楽しさ、見る楽しさ、支える楽しさ、知る楽しさを実感できる学習の工夫」が意識された授業であった。バレーボールに対する生徒のアンケート結果を参考に授業を組み立て、三段攻撃を中心に学習を進め、ICTを活用した分析により技術の向上が見られた。また、役割分担を通して協力し合う姿勢が育ち、チームとしての連携や作戦立案の力が高まり、新しい形の授業となった。次に、役員と各市町村の推進委員を中心に石狩管内の体力向上の実践交流により、石狩管内各市町村における取組の現状を把握することができた。各校のレポート交流や日頃の実践交流により、どの学校も現状を踏まえた体力向上の取組、授業改革の工夫がされているという確認ができた。また、グループ討議をすることで、実践交流がより深く学ぶことができる機会となった。今後は、各校、各市町村、石狩管内全体で更に工夫された実践が展開されていくことが期待できる。今年度の成果や課題を生かし、来年度も引き続き研究内容を深められるように部会員の力を借りながら研究を重ねていきたい。

最後に、今年度の研究中心城市町村である千歳市教育振興会、授業をしていただいた西田翔教諭、助言をいただいた高橋真吾教頭、各市町村の推進委員をはじめ、レポート実践に尽力いただいた会員の皆様に敬意を表すとともに、次年度の研究がさらに充実・発展し、会員の皆様の日常実践がさらに充実したものになることを願いまとめとする。

(文責 田尻 渚)